学会発表の内容

TriggerとしてのGn-RHアゴニストの使用は、
OHSSの防止以外に体外受精の成績に影響を及ぼすか

医療法人社団　徐クリニックARTセンター
清須知栄子　伊藤真理　中塚愛　徐東舜

【目的】
採卵時にhCGを用いて卵子を最終成熟させる方法が一般的であるが、多数卵胞の場合hCG投与でOHSSリスクが高くなる。 その代わりとして、卵巣への刺激時間が短いGn-RHアゴニスト使用でOHSSリスクの低下が報告されている。 そこで今回我々は、hCGの代わりにGn-RHアゴニストを使用することで体外受精の成績に影響を及ぼすかを検討した。

【対象】
2014年12月1日から2015年6月4日の期間に体外受精（CON：6症例、ICSI：27症例、split：27症例）を実施したAMH5.0 ng/mL 以上を対象とした。 hCGとGn-RHアゴニストのいずれをtriggerにするかをアットランダムに分けた。 両群とも30症例を対象とした。どちらを使用するかは、インフォームドコンセントを得た。

【方法】
①調節卵巣刺激は、全症例Gn-RHアンタゴニスト法で行われた。 月経3日目からFSHおよびhMGを投与し、直径18mm以上の卵胞が3個以上できた時点で、triggerとしてhCG 5000IUもしくはGn-RHアゴニスト1.5mgを投与し36時間後に経膣超音波下で採卵を行った。 採卵後、体外受精および顕微授精を行い、全症例において採卵後5日目で胚凍結を 実施した。
②OHSSの指標：OHSSの指標として、採卵後3日目と6日目の腹満感の有無、および採卵から月経開始までの日数（黄体退縮の日数）を比較検討した。
③体外受精の成績：体外受精の成績として、平均採卵個数、成熟卵子率（ICSI実施時のMII率）、受精率、胚盤胞形成率および良好胚盤胞形成率を比較検討した。

【結果】
①採卵後3日目と6日目の自覚症状を比較したところ、hCG群では半数以上が腹満感（+）であったが、 Gn-RHアゴニストでは腹満感（+）はほとんどいなかった。 また採卵から月経開始までの日数は、hCG群よりもGn-RHアゴニスト群の方が有意に早期月経となった。
②hCG群とGn-RHアゴニスト群の体外受精の採卵に関する比較では、平均採卵個数および成熟卵子率に差はみられなかった。
③ hCG群とGn-RHアゴニスト群の体外受精の培養に関する比較では、受精率・胚盤胞形成率ならびに良好胚盤胞形成率に差はみられなかった。

【結論】
OHSSが懸念される症例に対しGn-RHアゴニストをtriggerとして使用すれば、OHSSを予防出来るだけでなく、その後の胚発育などにnegativeな影響も与えない。 この調節卵巣刺激法を用いれば、体外受精の成績低下を招かずに、リスクの少ない体外受精ができると考える。